教育実践研究　第26集（2016）　217―222

[特別支援教育]

自立活動の目標を達成するための美術教育のアプローチによる事例的研究

－コミュニケーションに課題のある中学部生徒への指導を通して－

橋本雄一郎*

1　問題の所在

造形活動は純粋な心の創作活動であり，言語表現が苦手な子どもにとっても普段感じている思いや感情を表現することができる活動である。中学校学習指導要領（文部科学省，2008a；2008b）によれば，美術教育の目標の１つに「心の教育」の視点でとらえることがあげられている。美術科は，心の力つまり感性を豊かに育成することの重要性を指摘しており，目に見えない想像や心，精神，感情，イメージといったものを可視化・可触化できる唯一の教科であると述べられている。

特別支援教育に目を向けると，特別支援学校小学部・中学部指導要領（文部科学省，2009）には自立活動において個々の生徒の自立を目指し，心身の調和的発達の基盤を培うために６つの内容が示されている。その１つに「コミュニケーション」があり，状況に応じたコミュニケーションに関することがあげられている。これは場や相手に応じて，主体的なコミュニケーションを展開できるようにすることである。

岸田・大谷（2010）は，特別支援教育において教師の生徒理解を深めるためのカウンセリング的機能をいかした授業の取組という視点からアートセラピー的教育実践を行った。その結果，生徒についての理解が深まり，今後の支援の手立ての構築の一つの手法として活用していくことができる可能性があることが明らかになったという成果を得ている。

この研究から，特別支援学校での美術科の実践の中で目には見えない心，いわゆるコミュニケーションにおいて課題のある生徒の自立活動のねらいを達成するための学習プログラムを組み，支援方法の有効性を検証する必要があると考えた。

また，平成27年度の新潟県美術教育研究大会（新潟県美術教育連盟，2015）において，「かかわる　かわる　つなぐ造形教育」が研究主題として基調提案されている。それによれば，「かかわる」：現実感の乏しさの改善に向けて，コミュニケーションのあり方，素材とのかかわり，五感を使うかかわり等を大切にしていくこと　「かわる」：人と人との交流から自分が変わり，思考を深め，深まりから意識化を図っていくこと　「つなぐ」：子供の意欲を生かし，学校という小さな社会と地域をつなぐことで，子供の意欲が深まったり認められたりして，さらに意欲が高まることと説明されている。

以上のことからコミュニケーションに課題を有する生徒に対し，美術教育のアプローチから相手の表情に着目し，心の状態を読みとりながら絵を描く活動を通し，日常のコミュニケーションスキルの向上をさせることができると考えた。

2　本研究の目的

相手の気持ちを考えた適切な関わり方に課題のある生徒に対し，表現対象と直接関わり，イメージを適切に捉えられるような探求的な言語活動や絵画の表現力を高めて作品に生かしたり修正したりする活動を行う。その上で適切なコミュニケーションによる人間関係形成のための有効な支援方法を，生徒の変容を通じて明らかにする。

(1)　感情や気持ち等を言語化する活動による感情理解や言語表現のスキルの変容の検証
(2)　表現主題に対するアイデアスケッチから下描きに見られる人物の表情表現の変容の検証
(3)　人物の表情を捉える活動によるスキルの変容の検証
(4)　制作のための資料収集で，表現対象と直接関わる場面での様子や言語活動に見られる変容の検証
(5)　表情の学習や鑑賞会の場面での友達との関わりでの変容の検証

＊ 新潟県立柏崎特別支援学校

3　対象者（Ａ子）

⑴　対象生徒について

①　障害について

軽度知的発達の遅れ，発達障害の疑い，抑うつ不安傾向

②　特性について

複雑な家庭環境により，中学２年生の半ばまで就学猶予として学校で学んだ経験がなかった。中学２年生の９月から当校の適応指導の教室に通い，１月から正式に通学生として学習することになった。学級の所属は重複学級であり，下学年適応の教育課程を行っている。

最も支援を要する場面は，コミュニケーションの場面である。友達に対しても教師に対しても共通する言葉の表現で，相手の気持ちや言葉の裏にある意味を読み取ることが困難なために，興味本位の問いかけによって結果的に相手を傷つけてしまう行動が課題となっている。具体的な場面として，肢体不自由である友達に対して，「私も車椅子乗ってみたい。〇〇さんはどうして歩かないの」といった言葉を投げかけることがあった。

このような発言に対して教師からの指導を行った。学期末に個別の振り返りの時間を設定して，友達との関係を反省してみたところ，本人は相手を傷つける気持ちは全くなく，「ただ興味と知りたいと思う気持ちで言っただけ」という回答だった。そこで，教師から友達が実際に傷ついた気持ちを伝え，人の体の形，特に病気や障害の様子について話をする時は，して良いか悪いかよく考えて言葉を選んで話さなければならないことを分かりやすい言葉で指導した。その時のＡ子の様子は，両手で顔を隠して教師の話を静かに聞き，涙を流していた。

また，Ａ子は数学での図形問題や，美術での空間的な物の捉えとその平面表現が苦手な様子が見られる。絵画に関しては，もともと絵を描くことが好きで動物の絵本を見ながら楽しそうに描いている姿が見られた。そして自分の表現したいイメージをもっと上手に描きたいという希望をもっていた。しかし，美術の学習の中で友達の写実的な表現の作品を見て，自信を失ってきている言動が見られた。

Ａ子の医療の連携機関として，主治医としばしばカンファレンスを開いている。学校での様子や困り感を伝達すると，Ａ子の実態として，社会での生活経験が少ないこと，精神発達が幼い段階であること，発達障害の特性も見られること等があげられた。そして，学校で適切な支援方法によって経験を積むことで，今見られる課題を解決していけるのではないかという方針が確認された。

⑵　個別の指導計画

表１　Ａ子の個別の指導計画

長期目標	相手の気持ちを考えて適切な関わり方ができる。
短期目標	相手の気持ちに気付くことができる。

指導場面	目標達成のための手立て
自立活動時間の指導等	・１日の友達との関わりで，良かった場面を発表し合う。 ・複数の職員の情報を元に，一週間で人との関わりで課題が見られた場面を振り返り，適切な言動を指導する。 ・ＴＰＯに応じた言動のスキルを身に付けられるようソーシャルスキルトレーニングを行う。
美術科	・モデルとなる先生との関わりを通して人の思いを知り，表現に生かせるようにする。 ・思いの表現活動で人の表情を適切に読み取れたか，ワークシートで変容を評価する。 ・制作作品の鑑賞の時間を設定し，自分の思いを発表したり友達の思いを聞いたりする。

4　美術教育での実践

⑴　題材名　　絵画表現「人物を描く」～人への思いやイメージを絵画で表現する～

⑵　題材の目標

日頃より関わりの深い教師への感謝の気持ちを，絵画としてのイメージで捉え，イラストレーション等の技法を生かして表現し，自分の思いを人に伝えられる楽しさを味わう。

⑶　評価基準

表２　本題材における４観点の評価基準

ア　美術への関心・意欲・態度	自分の思いを表現するために，モデルと対話して適切にイメージを捉えたり，学習した知識技術を積極的に生かしたりして，造形表現を深めようとする。
イ　発想や構想の能力	モデルへの思いやイメージを言語化し，イラストレーションの楽しい表現方法を効果的に生かしながら表現している。
ウ　創造的な技能	思いを表現するために，学習した技能を活用し，のびのびとした描画や，配色や筆触等で工夫した彩色をしている。
エ　鑑賞の能力	自分が表現しようとしている思いや表現を言葉で他者に伝えられる。他者の作品を鑑賞し，肯定的な気持ちで捉えている。

(4) 授業展開（全15時間）

表３　本題材の指導計画

題　材	目　標	学習活動　※教師の支援
【導　入】 ○制作する絵画作品の説明 【鑑　賞】 ○先輩の作品を鑑賞する。 ■ワークシート１，２	・参考作品を鑑賞して，自分の制作のイメージをもつ。 ・作品のテーマを理解し，制作活動の見通しをもつ。 ・モデルの先生を決め，イメージを言葉で表現して，発表できる。	・制作テーマの説明を聞き，参考作品を鑑賞する。 ※知っている教師がモデルの参考作品を鑑賞し，自分の作品制作の見通しをもたせる。 ・自分が描きたい人物を選び，最初のイメージをワークシート１，２に言語化する。 ※自分のイメージを文章で表して発表しやすくする。 ・みんなの前で発表する。 ※発表のルールやマナーを指導する。
【アイデアスケッチ１】 ○最初の自分のイメージを表現する。	・自分のイメージの言葉から，いくつかのアイデアスケッチができる。	・言語化したイメージを元にして，アイデアスケッチを行う。 ※イメージを一つに決めず，いろいろなアイデアをスケッチするよう促す。
【質問用紙を作ってインタビューしよう】 ■ワークシート３ ■ワークシート２	・モデルの先生を知るための質問用紙が作れる。 ・先生との適切な関わりができる。 ・自分のイメージとの違いに気づき，現実的なイメージに改善する。	・ワークシート３に質問項目を記入する。 ※イメージと結びつけて，知りたい情報が聞ける質問になるよう支援する。 ・モデルの先生にインタビューする。 ・知り得た情報からワークシート２にイメージの改善を記入し，アイデアスケッチをする。 ※人との関わりで分かることがあることを強調する。
【イラストレーションの技法】 ○効果的な表現を学ぶ。 ■ワークシート４	・人物の実写とアニメ・イラストの表現の違いが分かる。 ・強調，誇張－単純，省略の表現効果を理解する。	・漫画「るろうに剣心」の実写映画とアニメ・イラストのプリントを見て，表現の違いを付箋に書く。 ※新潟に縁のある漫画について紹介する。 ・ワークシート４に付箋を分類する。 ※発言の場で，互いの考えを認め合えるよう支援する。
【アイデアスケッチ２】 ○イメージを効果的に表現する。	・前時に学習したイラストレーションの技法を活用して，モチーフの人物を効果的に表現できる。 ・作品に必要な資料を収集できる。	・モデルの顔写真を参考にして，スケッチブックにデッサンする。 ※デザインの技法を生かせるような参考作品を提示する。 ・人物の特徴をより表す背景について，本やインターネットで資料を集める。
【人の表情を知ろう】 ■ワークシート５	・人の表情を理解し表現に活かすことができる。	・ワークシート５で数種類の人の表情を見分けて適切な感情場面を記入する。 ※16種類の顔の表情の画像に吹き出しをつけて，生徒が自分なりの解釈で感情を記入できるプリントを用意する。 ・モデルの表情を見直しアイデアスケッチを改善する。
【アイデアスケッチ３】 ○最終的な構想をまとめる。	・描きたいイメージの構想がまとまる。 ・先生との適切な関わりができる。	・最終的なアイデアスケッチを完成させる。 ※写実性にとらわれず，自己の表現性を奨励する。 ※人物モチーフに対する道徳的な表現を心掛けるよう指導する。 ・モデルの肖像を描く許可をとる。 ・モデルの写真を撮影する。 ※適切な態度で許可を得るよう例文を元に指導する。
【下絵制作】	・アイデアスケッチと資料やワークシートを生かして下絵を表現できる。	・四つ切り水彩画用紙に鉛筆で下絵を描く。 ※今までの学習の成果を発揮できるよう，参考になる資料を振り返るよう支援する。
【鑑賞１】 ○下絵鑑賞会 ■ワークシート６	・自分の作品制作の意図を説明したり，友達の作品の良さを感じ取ったりできる。	・鑑賞プリントに自分の作品紹介と，友達の作品への感想とアドバイスをまとめ，発表する。 ※ワークシート６に自分の作品の制作意図の説明や，友達の作品の良さについて，文章で表し発表しやすくする。
【人の表情を知ろう２】 ■ワークシート７ ■ワークシート５	・人の表情を理解して思いを表現できていたか確認する。 ・作品の下絵を見直し，工夫できるところを改善する。	※前回の実態から，学習した知識を制作に生かせるよう，再度具体的に表情の構成要素を学ぶ機会を設定した。 ・ワークシート７で，顔の表情を構成する要素（目，眉毛，鼻，口）から，表情を読み取り記入する。 ・再度，ワークシート５で数種類の人の表情を見分けて適切な感情場面を記入する。 ・自分の作品と比較して表情と思いの表現が一致しているか見直す。 ・特に表情を誇張するくらいに工夫する。
【彩色】	・イメージに合わせて水彩絵の具を効果的に活用し，彩色ができる。	・水彩絵の具で彩色する。 ※水彩絵の具の，淡彩重ね塗りの効果的な使い方を指導し，画面全体で調和のとれたイメージを表現できるよう指導する。
【鑑賞２】 ○完成作品鑑賞会 ■ワークシート８	・鑑賞会で自分の作品制作の意図を説明したり，友達の作品の良さ・面白さを感じ取ったりできる。	※鑑賞プリントで自分の考えを文章でまとめ発表しやすくする。 ・鑑賞プリントに自分の作品紹介と，友達の作品について感想をまとめ発表する。 ・作品のコピーをモデルの先生にプレゼントして感想をもらう。 ・題名を決め，文化祭で展示する。

表４　使用したワークシート一覧

ワークシート１	導入プリント。作品のテーマと制作活動の説明。描きたい人物の候補を記入する。
ワークシート２	描きたい人物の，最初のイメージとインタビュー後のイメージを記入する。
ワークシート３	モデルの先生を知るための質問用紙。自分の制作に必要な情報を得る質問項目を記入する。
ワークシート４	漫画「るろうに剣心」の実写映画とアニメ・イラストの表現の違いを付箋に書き，強調，誇張－単純，省略に分類する。
ワークシート５	数種類の人の表情を見分けて，適切な感情場面を記入する。
ワークシート６	下絵作品鑑賞プリント。自分の作品紹介と，友達の作品について感想を記入する。
ワークシート７	顔の表情を構成する要素（目，眉毛，鼻，口）から，どんな感情を表している表情か読み取り記入する。
ワークシート８	完成作品鑑賞プリント。自分の作品紹介と，友達の作品について感想を記入する。

(5)　結果

・【導入】では，制作テーマに高い関心を見せた。作品のイメージをもち，選択したモデルについて「さわやか」「優しい」という思いを言語化したが，学校の授業で見る先生の姿以上のイメージはできなかった。ワークシートに記入したモデルのイメージを恥ずかしがりながら発表していた。他生徒の発表はよく聞き，共感して拍手していた。

図１　作品Ａ

・【アイデアスケッチ１】では，イメージを一つに決めず，複数のアイデアスケッチをするよう指導したが，導入時の言語化したイメージ通りに，音楽の授業をする教師の姿のみの表現になった（作品Ａ）。また，イメージによる机や教室の表現が幼く，適切な空間を表現することが難しかった。

図２　作品Ｂ

・【質問用紙を作ってインタビューしよう】では，モデルと関わることでイメージを膨らませることをねらい指導を行った。質問用紙作りで制作に必要な情報を得る質問項目ができず，他生徒のアンケートを参考にしたところ適切な質問項目を作成することができた。モデルの情報を得て，プライベートの姿があることに驚き，ワークシート２に家庭的なイメージの「家で子どもと遊んでいる姿」に変更していた。しかし，アイデアスケッチでは，人物の姿が小さくなってしまった（作品Ｂ）。

・【イラストレーションの技法】では，表現の違いについて概ね解答できたが，違いを比べた言語の表現が難しかった。他生徒との学びの中で，効果的な表現方法の知識として理解できた様子だった。

・【アイデアスケッチ２】では，小さくなった人物をのびのびと表現できるようモデルの顔写真を参考にさせたが，資料を見たままの印象でデッサンを進め，前時に学習した効果的な表現方法は生かされなかった。インタビューで知り得た情報から資料の必要性に気付き，作品の背景に参考となる画像を集めることができた。

・【人の表情を知ろう】では，表情を捉える力の確認を行ったところ，概ね適切な解釈ができていたが，困っている顔や無表情の解釈が難しい様子が見られた。その後のモデルの表情を見直したアイデアスケッチでは顔の表情にもう少し工夫が必要だが，のびのびとした描画で優しい印象の人物像が表現された。

図３　作品Ｃ

・【アイデアスケッチ３】では，今までの情報や資料を生かして，描きたい空間が適切に表現されたアイデアスケッチができた（作品Ｃ）。資料画像を見て描いた椅子や机が正しい立体に近くなった。絵画の説明的な情景と，モデルに感じた優しさという思いを主題として，家庭の中の母の姿を表現できるようになった。

・【下絵制作】では，大きな画用紙に対して小さな表現になってしまった。人物の顔や動きの表情が少し豊かになってきたが，既習事項は十分生かせていない。

・【鑑賞１】では，自分が描いている内容や表現しようとしている思いを簡潔にまとめることができた。発表はやや恥ずかしがりながら小声でしていた。友達の作品に対して肯定的な共感と適切なアドバイスができた。

・【人の表情を知ろう２】では，表情の表現を高めようと顔の要素から表情の読み取りを深める支援を行った。目，口だけの画像に怖がって顔を背けていたが，基本的な感情の読み取りは概ねできていた。以前のワークシート５の解答と同様に微妙な表情の読み取りが難しかった。自分の表現主題と表情の一致を確認したが，さらに工夫しようと改善し，より豊かな思いの表現

図４　作品Ｄ

ができた（作品D）。

・【彩色】では，モデルの明るい元気な母が家族と楽しそうにしている様子を黄色系の色彩で表現することができた。

・【鑑賞２】では，自分の作品に満足し，自信をもって発表することができた。友達の作品に共感し，他人の感じ方の違いや表現の多様性に気がついた様子だった。モデルの先生に，恥ずかしがりながらも作品をプレゼントし，とても喜ばれたことに達成感をもてた様子だった。

5　考察

(1)　感情や気持ち等を言語化する活動による感情理解や言語表現のスキルの変容の検証

ワークシート２ではモデルに選んだ女性の先生についてA子は「さわやか，優しい」と表現している。ワークシート５，７では喜怒哀楽のはっきりした感情を意図した図について「うれしい，おこっている，かなしい，たのしい」と解答している。これらの言語活動に見られた感情理解の様子や言語表現から，A子の生活経験の中においてある程度の基本的な人のイメージや感情の捉えはできていることは確認できた。ただ，ワークシート２においてモデルについての最初のイメージを「〇〇さんと授業している先生」と表現している。これは，他人とより親しく関わり，適切な関係性を築く経験が不足しているため，生活経験以上の想像力に乏しい。また集団生活や学習経験の不足により，言語表現の幼さや不適切さがあると感じられる。それが実際の人間関係作りに影響を及ぼしている。しかし，ワークシート２においてモデルと直接関わった後のイメージを「家で子供と遊んでいるお母さん」と表現している。実際の人と関わりに必要な情報を得たことで，その人を把握するための言葉の表現に多面的な人間味が表れた。現実感の乏しさが改善され，経験と言語表現が結びついた結果であると考えられる。

(2)　表現主題に対するアイデアスケッチから下描きに見られる人物の表情表現の変容の検証

最初に描いた（作品A）は，モデルの教師が教室で授業をしている様子を画面一杯にのびのびと表現している。ただ主題である人物は棒立ちで表情に乏しく，ピアノや机等の立体物が平面的で展開図の様な空間表現の作品であった。モデルに対するイメージは普段見る教師の姿に止まり，目標とする個性的なイメージの姿は表現できなかった。これは，絵画表現への意欲の高さは感じられるが，学習経験の不足による表現の幼さと空間の認知の困難さと言える。また，「思いつくイメージのアイデアをいくつも描こう」との制作指示をしたのだが，この一枚のアイデアスケッチに固定されたのは，モデルとの関わりが足りずイメージを膨らませる情報の不足と言える。

インタビュー後に描いた（作品B）は，モデルの自宅の風景で家の中にいる人物を表現している。作品Aと比較すると，モデルに対するイメージが「家で子どもと遊んでいる姿」に変わった。しかし，状況の説明が大きくなり主題である人物の姿が小さくなってしまった。これは，自分が見ていない空間や物の形や状況等の具体的なイメージが表現できないためである。

人物に焦点を当てた表現の学習の後の（作品C）では，画面の中央に人物が大きく描かれた。モデルの笑顔の画像を参考にしたため，表情が描かれるようになった。これは，人物を主題とした作品というテーマを再認識させ，A子がモデルに感じた思い「母の優しさ」を表現することが目標であることに気付いていたためであると考えられる。人物の背景は，参考資料の画像を参考にして自分が表現したい「あたたかい家庭」の空間を説明するものを描くことができた。これは，経験不足を補う具体的な状況や物のイメージが得られたからである。

人の表情をさらに分析して学習した後の（作品D）では，モデルの姿が今までで一番生き生きと描かれている。人物のプロポーションについて，体が細く女性的になり，頭部は大きくなってより笑顔が誇張された。作品Cと比較して体の動きがより豊かな表情を見せていた。これは人の感情を表す顔の部分の動きを理解し，得られた知識を自分の表現主題（楽しい家庭の元気なお母さん）に合わせて応用することができた結果と言える。

(3)　人物の表情を捉える活動によるスキルの変容の検証

人物の表情を読み取るワークシート５，７でA子が記入した言葉から，生活経験の中においてある程度の基本的な人の表情の捉えはできていることは確認できた。ただ，少し動揺した感情を意図した「眉毛が上がり，目を開き，口を半開きにした表情」について，A子は「ぼーっとしてやる気がでない顔」と解答した。また，悔しさや悲しい気持ちを押し殺している感情を意図した図の「しっかり閉じて，唇を噛みしめている口」について，A子は「考えている時」と解答した。これは，他人とより親しく関わり，適切な関係性を築く経験が不足しているため，生活経験以上の微妙な表情の捉え（特に困っている顔や無表情に近い顔）に困難さがあると感じられる。人の表情を捉える活動を実施した後での

再度ワークシート５の解答で同様の誤った解答が見られたことで，微妙な表情の読み取りが今後も課題であることが分かった。また，人の顔の部分に恐怖感をもってしまい相手の表情をよく見られないということが分かった。それらが人の感情の読み取りや実際の人間関係作りに影響を及ぼしていると考える。この学習では他の生徒の考えを聞き，自分の考えと違うものについて記入することを指示したことで，あらたな気付きが見られた。それにより図になった表情の形を理解し，絵画の知識として自分の表現主題（楽しい家庭の元気なお母さん）に合わせて応用することができた結果と言える。

⑷　制作のための資料収集で，表現対象と直接関わる場面での様子や言語活動に見られる変容の検証

人と関わる経験が不足しているＡ子にとって，直接的に相手を知る目的のインタビュー活動を行うと説明を聞いた時は，恥ずかしがりやや消極的な姿勢を見せていた。ワークシート３のインタビューの質問項目作りでは，どういうことを質問したらよいか分からずに困っていた。その後，友達のワークシートを参考にして「何をしている時が楽しいと思いますか。」「家では何をしていますか。」「魔法を使えたら何をしたいですか。」等と教師が想定した質問項目作成することができた。この活動で，自分の作品に必要な情報を得るための質問項目において，「こういうことを聞けば人のことを知ることができるのか」という，人との関わり方の気付きが見られた。実際のインタビューの場面ではモデルと対面しても恥ずかしがらず，相手に興味をもって話しかけていたことで会話がはずみ，関わりを楽しむことができていた。このことから，今後人との関わりに自信と積極的な気持ちをもつようになり，他人とより親しく関わる経験を積む中で，適切な人間関係作りのスキルが向上するものと期待する。

⑸　表情の学習や鑑賞会の場面での友達との関わりでの変容の検証

ワークシート３のインタビューの質問項目作りの場面で困っている時に友達に支えられたことがあった。また，ワークシート４のイラストレーションの技法について自分の気がつかない技法の面白さを友達の意見によって理解し深まる様子があった。ワークシート５，７の表情の読み取りや言語での感情表現では，自分とは違った友達の表情の読み取りや豊かな言語表現を聞き記録していた。ワークシート６，８の作品鑑賞会ではそれぞれのモデルに対する印象について，共感する部分や違いに驚いていた。これらの活動から，自分の知らないこと気づかないことを教えてくれる大切な仲間という思いがもてた様子である。また自分の作品を肯定的に共感してくれたり，友達のモデルの自分とは異なった感じ方を表現した作品を鑑賞したりしたことで，人の感じ方の多様性や価値観の違いに気が付いたと考える。これにより他者理解の力が身に付き，今後の適切な人間関係作りのスキルが向上するものと期待する。

６　まとめ

筆者は今回の美術教育の実践がＡ子にとって自立活動の目標達成の確かな一助になったと考える。「人物を描く」という制作過程において人に対しての発見や驚きがあって表現主題が生まれ，そこに学習した知識や技能と豊かな感性が結びついて，自分の思いが伝わるより個性的な表現に至ることができた。また，人と関わる場面の設定や，人の表情を読み取る活動をしたことは，美術の「よりよく表現しようとする」ために探求する活動となったと同時に，生きる力でもある「人間関係を形成する力」等を培う活動として有効であった。実際，すぐには適切な人間関係を築く大きな変容は見られないが，今まで以上に感情の読み取りが身に付かずとも，人の顔に感情が表れやすく「そこに注目すれば相手の気持ちが分かる」ということに気付き普段から表情に留意するようになってきた。

今後もＡ子のコミュニケーション能力の向上が課題である。自立活動時間の指導の場面において表情の読み取りの学習を積み重ねていく。また，学級活動等の時間において１日の言動の良かった点を自己評価する活動や，一週間の中で不適切なコミュニケーションが見られた場面の情報を元に振り返りをして，その場面に適切な言動のシミュレーション活動を行おうと考えている。このようにＡ子の生きる力のひとつ「人間関係を形成する力」を身に付ける支援を継続していく。

〈引用・参考文献〉

１）岸田由佳，大谷正人（2010）「特別支援教育におけるアートセラピー的アプローチの可能性」三重大学教育学部研究紀要　第61巻　教育科学，219～249pp
２）新潟県美術教育連盟（2015）「第30回　新潟県美術教育研究大会　基調提案」
３）文部科学省（2008a）「中学校指導要領　美術」
４）文部科学省（2008b）「中学校指導要領解説　美術編」
５）文部科学省（2009）「特別支援学校　教育要領　学習指導要領」
６）長崎自立活動研究会（2010）「自立活動　学習内容要素表」